

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

高等教育における「ミュージアム体験」の可能性：
共同研究【若手】：
高等教育機関を対象にした博物館資料の活用に関する研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 呉屋, 淳子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008491



大学のフィールドワーク実習の様子。学生達は500年以上続く五城目町の朝市（左写真）や、消滅した集落跡地（右写真）を見学する（2015年10月1・2日、秋田県南秋田群五城目町、石倉敏明撮影）。

秋田県立博物館におけるミュージアム体験授業（2016年4月13日、石倉敏明撮影）。

情報だけでなく、ミュージアムそのものの運営がどのように行われているのかということも把握しておく必要があるという。ここで少し絵本の内容を紹介してみたい。

主人公である丸太少年のキュッパが、森のなかでたくさんのモノを拾い、モノの名前を調べては分類し、ラベリングを行っているところから物語がはじまる。キュッパは、森で葉っぱや石ころなどを収集してきたが、街にすむおばあちゃんにモノをどのように収納したら良いかについて相談する。その結果、キュッパは「はくぶつかん」をつくり、これまで収集した資料を展示することにした。

この物語のなかにはいくつか重要なシーンが登場する。たとえば、キュッパが森のなかで拾ったモノを収集し、分類し、展示を行うまでのプロセスが描かれているだけでなく、積極的に広報活動を行うことが重要とされている。このことは「ミュージアムとは何か」といった問いを考える場合、外部（あるいは他者）とのコミュニケーションという要素がいかに大切なのかを示している。また、モノを展示して終わるのではなく、「はくぶつかん」に人が来た時には、解説するという学芸員的な仕事ははじまる。その際のキュッパの話し方には、博物館学や人類学といった専門的な語り口は一切みられない。そして、キュッパの「はくぶつかん」は、オープンして2週間後に閉館してしまう。そこでは、実際の博物館の場合ではなかなか語られないことだが、博物館が閉館する時、収集した多くのモノ資料をどのように返還したらいいのかなどについても描かれている。モノ資料を返還する前に、キュッパは全てのモノ資料を記録し、図録を作成した。この作業は、記録を残すためだけでなく、展覧会に足を運べなかった人にも展示をみてもらえるようにと行われたものである。

高等教育における「ミュージアム体験」の可能性

こうしてみると『キュッパのはくぶつかん』は、子ども向けの絵本として刊行されている一方で、そこに描かれている「ミュージアム体験」は高等教育における学びと共通している側面があることに気づく。たとえば、近年、多くの大学が、時代や社会に順応する人材を育成するのではなく、多彩な人々たちとの交流を通して進取の気性に溢れた創造力豊かな人材を育成することをカリキュラム・ポリシーとしている。とくに、現代社会における問題を自分自身で発見し、それを探求していく能力を養うことが大学の使命とされ、同時に地域社会と連携しながら教育活動を行うことが重視されている。このことは、フィールドワークの手法を用いた講義が推奨されている状況からもみてとれるだろう。

いずれにせよ、学生たちは、大学の講義のなかで、地域社会にある課題を自ら発見し、それを探求することをフィール

ドワークという手法を通して学んでいる。そしてそこでは、地域の人々といかにコミュニケーションをとるかが課題である。その場合、対話のみを重視してしまいがちだが、じつは「よくみること＝観察」も必須である。なぜなら、「よくみること」は、未知のものに出会うきわめて重要なルートであり、モノ資料を「よくみること」は単なる視覚的な活動ではなく、思考そのものだからである。さらに、そこに他者との言葉によるやりとりが介在することにより、みることはより思考に密接に関わることになる（横山 2016: 89）。そのような意味で、『キュッパのはくぶつかん』における「ミュージアム体験」は、未知なる文化へのアクセス方法として共有されるだけでなく、高等教育機関で求められる学びを豊かにする上でも有効であるといえないだろうか。もちろん、博物館資料をどう活用するかということも重要であるが、その一連の作業となるベースに何があるのかについて高等教育の関係者も交えてもっと積極的に議論する必要がある。

最後に、本共同研究は、教育を学校教育と同一視せずに、教授過程という観点から広く捉え、国内外のミュージアムの機能や役割を把握し、人類学の視点を導入しながら議論を深めていくことを目的としている。そのためには、大学教員主体の教育能力の向上、学生主体の学習の開発に関するファカルティ・ディベロプメントの再検討も同時に進める必要がある。今後も、高等教育における「ミュージアム体験」の可能性について議論を深めながら、ミュージアムと高等教育機関が連携した新たな価値創造空間の生成について研究を進めていく予定である。

【参考文献】

- 横山佐紀 2016 「コメント：美術館からみる『みんぱっく』で教室と世界をつなごう！」 上羽陽子・中牧弘允・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄編 『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』（国立民族学博物館調査報告 138）pp. 89-90 大阪：国立民族学博物館。
ヨンセン、オーシル・カンスタ著 2012 『キュッパのはくぶつかん』 ひだにれいこ訳 東京：福音館書店。

ごやじゅんこ

沖縄県立芸術大学音楽学部准教授。専門は、教育人類学、比較教育学。民俗芸能を創造する「場」としての学校に着目しながら、朝鮮半島、南西諸島、近年は東北地方の学校で調査研究に従事している。著書に『「学校芸能」の民族誌—創造される八重山芸能』（森話社 2017年）、論文に「박물관자료를 활용한 교육활동」 일본국립민족학박물관사재를 중심으로」 국립민속박물관연구원 『어린이와 박물관연구』（「博物館資料を活用した教育活動—日本国立民族学博物館の事例を中心に」 韓国国立民俗博物館編『子どもと博物館研究』）2014年。